

るなり。豈危からずや。民を愚にするを以て、爲政の極意と爲す如きは、鎖國時代の政策にして、東西交通の今日、決して施し得べきものに非らず。

第五節 喇嘛、回々兩教徒の將來

喇嘛教及回々教の由來と現況とは、前既に述べし所に依り、略明かなりしならん而して今や此の兩教徒の將來に就て、一言すべきもの有り。

抑も喇嘛教徒は、宗教を信ずると云はんより、寧ろ之に心酔せりと云ふを適評とせん。其の宿弊の潜む所、根柢甚た深くして、容易に抜くべからず。一大高僧の出て、根本的刷新を行ふに非ざれば、到底社會人心を支配すべき宗教たる價值なきは勿論、該教徒たる人民は、益々世の文明と背馳し、愈々蒙昧の界に沈淪するのみならず、國民的精力は次第に減少して、終に滅亡の悲境に陥ること無きを保せざるなり。回顧すれば、現在喇嘛教徒たる彼れ蒙古民族は、嘗て千古の英傑成吉思汗に屬し、鐵蹄歐亞兩大陸を蹂躪せし勇壯なる民族たりしも、今や其面影を見る由も無く、近くは同治回亂の際の如き、譜代恩顧の清國官兵が、回匪の毒手に全滅の悲劇を演ず